

複合連結式ため池群と水供給システムを軸とした 文化的景観の保全と活用の可能性に関する研究

大分大学 経済学部 寺村 淳

1. はじめに

世界農業遺産の認定基準のひとつに景観及び土地・水管理の特徴があり、国東サイトでは複合連結式のため池群による水管理システムが登録の要素となっている。本研究では世界農業遺産国東半島宇佐地域における「ため池群と水管理システム」の価値について調べた。また、世界農業遺産の利用の可能性について、農業・文化・環境・地域などの観点から、教育ツーリズムや体験教育での利用の可能性を想定して、体験プログラムを試験的に実施した。

2. 国東サイトの連結式ため池群の価値

国東半島は雨の少ない地域で、川も短いことから、常に水不足に悩む地域であった。その為、非常に多くの「ため池」がつくられ、冬や梅雨時期に池に貯めた水を田んぼづくりなどで利用してきた。しかし、一つのため池だけでは必要な水の量を賄えないことが多く、ため池の上流や隣の川にもため池をつくり、それらを連結して必要な水の量を確保してきた。

ため池の水の利用は国東サイトの地域の中で非常に重要で、水をうまく利用するための工夫が色々なところで見られることがわかった。

ため池をつなぐ水路：ため池の水は用水路によって田んぼや下流のため池まで運ばれる。国東半島は地形が複雑で起伏が激しいため、しっかりと水が流れる水路をつくるには高い技術が必要であった。その為、国東市の松ヶ迫地区ではうまく水が流れなかった水路跡なども残っており、当時の工夫がしのばれる。

掘り掛け水路：ため池にできるだけ効率的に水を貯めるため、ため池の周辺の山には沢水などをため池に流れ込ませるための集水路がつけられていることがあり、掘り掛け水路という。この水路の特徴は、本来ため池に流れ込まない隣の川などの水を集めてため池に流れ込むようにしている工夫にある。

貫(ヌキ)と間歩(マブ)：複雑な国東の地形に水路を通すため、一部をトンネル水路にしている場所がある。これは国東市では貫(ヌキ)と呼ばれ、安心院町では間歩(マブ)と呼ばれていた。水路の開削同様高い技術が必要である。

池守：ため池や水路の管理は「池守」と呼ばれる地域の担当者が行ってきた。ため池の草刈や水路の掃除など日常的なことから、ため池に潜ってため池から流す水の量を調整するなど責任の重い仕事であった。

シイタケ原木栽培と水稻栽培：ため池の水は主に水稻栽培(お米づくり)に利用されてきた。一方で、ため池の周りにはクヌギの木が植えられることが多く、落ち葉が池の周りの保水性をよくして、池の機能を高めてきた。クヌギは現在ではシイタケの原木栽培に利用され、20年に1回程度伐採されるが、切株から芽が出て早く成長するため効率が良く、生きものたちが棲みやすい効果もある。また、原木シイタケづくりは、作業が水稻栽培の作業の少ない時期と重なっていて非常に相性が良い。

これらのように、ため池は地域の中で必要不可欠なものとして、その利活用において地域の中で様々な工夫がなされ、今の国東サイトの風景を創り出している。

3. 世界農業遺産を知るための体験プログラムの試験的实施

地域の中で体験活動を実施することによって国東半島の地域の風景の中心であるため池と水利用や世界農業遺産について理解できるかをプログラムを実際に実施して評価した。

試験実施したプログラムは事前学習・現地実習・事後学習の流れで実施し、アンケートによって効果について調べた。

この結果、世界農業遺産はプログラム実施前はほとんど知られておらず、具体的なイメージが乏しかったことに対して体験活動を実施したことで、世界農業遺産への理解が進み、地域の多様なイメージが形成されたことがわかった。つまり、知らない状況では世界農業遺産も国東半島も農業も関連性があることと理解できていないが、知識と体験によって、世界農業遺産を軸に、国東半島の農業の実態、文化、歴史、生活、生物等、地域の中の多様な物事が複雑に関連していることが理解できたといえる。つまり、世界農業遺産を知るためのプログラムは地域社会を理解するために効果的なプログラムであるといえる。



松ヶ迫池 (国東市武蔵町吉広)